慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	F. エンゲルスの「下からの革命」概念と「上からの革命」概念 : 社会構成体移行論における「上からのブルジョア革命」概念の批判のために
Sub Title	Über den Begriffs der "Revolution von oben und von unten" Bei F. Engels
Author	石川, 治夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.6 (1982. 12) ,p.893(85)- 901(93)
JaLC DOI	10.14991/001.19821201-0085
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19821201-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

F. エンゲルスの「下からの革命」概念と「上からの革命」概念

——社会構成体移行論における「上からのブルジョア革命」概念の批判のために——

石川治夫

第1節　はじめに

近代天皇制国家の形成・確立・変容過程の特質を，「上からのブルジョア革命」概念によって把握しようとする試みは，下山三郎氏『明治維新研究史論』[1]以後，日本近代史研究の一つの新しい潮流をなしている。[2]しかしこの試みは，現在までのところ見るべき成果をあげていないばかりか，「上からのブルジョア革命」概念が，概念自体の検討ぬきに，安易に歴史的過程の分析に適用されていることから，かえって日本近代史研究に混乱をもたらしている。「上からのブルジョア革命」は，故服部之総氏が，日本におけるブルジョア革命の特質把握のために，エンゲルスから援用した概念であるが，マルクス・エンゲルスの論説の中においては，「上からのブルジョア革命」という用語は一度も使われていない。しかし，エンゲルスは「上からの革命」という用語を数か所で使用しており，エンゲルスの「上からの革命」と服部の「上からのブルジョア革命」が同一の歴史的過程（ドイツ第二帝政成立過程）をさしていることから，服部は，エンゲルスの「上からの革命」概念を「上からのブルジョア革命」概念と読みかえ，日本近代史研究に適用したものと考えられる。

「上からのブルジョア革命」概念の日本近代史への適用に関しては，山崎隆三氏，[3]芝原拓自氏[4]が異論を唱えられているが，これら両氏の主張もまた，「上からのブルジョア革命」概念のドイツ第二帝政の史的分析における有効性を認めたうえでなされている。このように，日本近代史研究における「上からのブルジョア革命」論をめぐる論争は，すべて「上からのブルジョア革命」概念を承認したうえで行なわれており，その過程で当然なされねばならない，「上からの革命」概念の「上からのブルジョア革命」概念への読みかえの是非を検討する作業は等閑に付されている。

本稿の課題は，エンゲルスの「上からの革命」概念と服部の「上からのブルジョア革命」概念を比較考察することによって，両者の相違を明らかにし，服部によるエンゲルスの読みかえの過程を検討することにある。60年代後半以降，「講座派」の流れに属する研究者の間に，服部の「上からのブルジョア革命」概念を安易

注（1）「絶対主義的天皇制の性質の転換を理解するかぎとなる概念としては，既存のものでは『上からのブルジョア革命』という概念しかないのではないかと思う」（下山三郎『明治維新研究史論』1966年，御茶の水書房，p. 92）

（2）「天皇制絶対主義は，独占段階の階級矛盾・階級闘争の進展に対応して上からのブルジョア革命を推進し……帝国主義的統治構造へのすべり込みを開始し，そうすることによってはじめて国際帝国主義の一環を形成した」（後藤靖「近代天皇制論」，歴研・日本史研編『講座日本史・第9巻』1971年，東大出版，p. 217）

大石嘉一郎氏は，「上からのブルジョア革命」の端緒・開始の時期をそれぞれ大久保政権成立～明治14年政変，天皇制国家の成立～確立期（1900年頃）に求めたうえで，第一次大戦後，日本帝国主義の（国独資的）再編の基礎的一環として「上からのブルジョア革命」が新たな段階で本格化し，戦後改革によって完成された，という試論を提出されている。（「戦後改革と日本資本主義の構造変化」東大社研編『戦後改革・第1巻』1974年，東大出版，pp. 95～7）

（3）山崎隆三「『上からのブルジョア革命』論について」『大阪市大経済学雑誌』73—5/6，1975年。

（4）芝原拓自「近代天皇制をめぐる一理論問題」『歴史学研究』453号，1978年。

に受け入れ，この概念を日本近代史研究に適用しようとする傾向が見られるようになったが，「上からのブルジョア革命」概念の日本近代史研究への適用は，近代天皇制国家の構造的特質把握をめざした「講座派」理論の批判的継承の課題から逸脱するもの[5]として，再考を要するのではないかと考えたからである。

第2節　エンゲルスにおける用語
——「上からの革命」の使用例

エンゲルスは，未完の論説『歴史における暴力の役割』（1887年12月～1888年3月）において初めて「上からの革命」という用語を使用して以来，最晩年に至るまでの間に，計六か所においてこの用語を使っている。まず始めに，それらの使用例をエンゲルスから引用する。

i）『歴史における暴力の役割』（1887年12月～1888年3月）

それ〔＝1866年のドイツ内戦〕[6]は革命的手段によって遂行された完全な革命であった。もちろん，われわれは，このことで彼〔＝ビスマルク〕を非難するつもりはさらさらない。われわれが彼を非難するのは，反対に，彼が十分に革命的でなかったこと，彼がただ上からのプロイセン流の革命家であったこと，彼が革命を半分しか遂行できない立場で全革命を始めたこと……である。[7]

ii）「1891年の社会民主党綱領草案の批判」（1891年6月）

だいたいわれわれの「連邦国家」そのものが，すでに統一国家への過渡なのである。そしてわれわれは，1866年と1870年におこなわれた上からの革命を逆行させるのではなく，下からの運動によって必要な補足と改良をこれに加えるべきなのである。

だから統一共和国ということになる。[8]

iii）「『ロシアの社会状態』へのあとがき」（1897年1月）

そのとき，ドイツに端を発した上からの革命の時代がやってき，それと同時に全ヨーロッパ諸国における社会主義の急速な成長の時代がやってきた。[9]

iv）「『フランスにおける階級闘争』1895年版序文」（1895年3月）

(a) この男〔＝ルイ・ボナパルト〕は，1851年12月2日に軍隊をもちいてこの緊迫した情勢に結末をつけ，ヨーロッパに国内的安寧を確保したが，その代わりに戦争の新時代をもたらした。下からの革命はひとまず終わって，上からの革命の時期が始まったのである。[10]

(b) 彼〔＝ルイ・ボナパルト〕の模倣者ビスマルクも，プロイセンのために同じ政策を採用し，1866年に彼のクーデター，彼の上からの革命を，ドイツ連邦とオーストリアとに対して遂行した。同様にまたプロイセンの紛争議会に対してもこれをおこなった。[11]

v）『ル・フィガロ』紙特派員とのインタビュー（1893年5月）

記者は，国内におけるクーデターの可能性のことを

注（5）「今後はあらためて補助概念〔＝資本制経済構成体の成立過程，資本制社会構成体への転換点，など〕にたよることをさけ，上からのブルジョア革命という概念のみによって，天皇制の階級的性格の変化を検討してゆきたい。」（下山三郎「服部之総論ノート」『東京経大65周年記念論文集』1965年，p. 241）「その体系性と論理性において，今日なお服部氏を抜く所説（上からのブルジョア革命についての）を発表しえた近代史家はいない。」（同，p. 252）

他方，中村政則氏は，服部の論理を批判的に継承することを通じて，『『未完の体系』たる服部体系を発展させる」（「序説・近代天皇制国家論」中村編『大系日本国家史・近代Ⅰ』1975年，東大出版，p. 58）ことをめざし，日露戦後に近代天皇制国家が日本型絶対主義（絶対主義的天皇制）として確立した，という所説を展開することによって，服部の「上からのブルジョア革命」論を克服したとされている。しかし，中村氏が，日本型絶対主義の形成過程において，一旦，古典的絶対主義の成立（1877年）を考え，その古典的絶対主義がブルジョア的な方向における「自己転換」（同，p. 44）によって，日本型絶対主義への移行を開始するものである，と把握されている点から，私は，中村氏にあっても，服部の「上からのブルジョア革命」論が十分に克服されているわけではない，と考える。

（6）引用文中の〔　〕は，引用者による挿入を示すものとする。

（7）エンゲルス『歴史における暴力の役割』1887～8年，『マルクス・エンゲルス全集』第21巻，p. 433（原）。マルクス・エンゲルスからの引用は，大月版『マルクス・エンゲルス全集』（1959～）による。引用箇所は巻数と原ページ数によって示す。

（8）エンゲルス「1891年の社会民主党綱領草案の批判」1891年，第22巻，p. 236.

（9）エンゲルス「『ロシアの社会状態』へのあとがき」1894年，第22巻，p. 672.

（10）エンゲルス「カールマルクス『フランスにおける階級闘争，1848年から1850年まで』（1895年版）への序文」1895年，第22巻，p. 517.

（11）同前。

あくまで主張した。「おお！」と彼〔＝エンゲルス〕は反論した。「私はけっして，私が上からの革命と呼ぶものが将来にとっての脅威でないなどと言っているのではありません。」[12]

以上がエンゲルスによる用語――「上からの革命」の使用例である。次に，これらの使用例において，この用語が何をさしているかということを検討する。第一に，i)，ii)，iii) bにおいて，用語――「上からの革命」は，1866年〔プロイセン―オーストリア戦争〕と1870年〔プロイセン―フランス戦争〕の二つの戦争を通じて達成されたプロイセンによるドイツ統一過程をさしている。特にii) において，エンゲルスが「上からの革命」に対して統一共和国の建設を提起していることに注意しなければならない。第二に，iii)，iv) aにおいては，「上からの革命の時代（時期）」という使い方がなされているが，この「上からの革命の時代」は，iii) ではプロイセン―オーストリア戦争（1866年）以後，iv) aではルイ・ボナパルトのクーデター(1851年)以後，ヨーロッパにもたらされた「新時代」をさしている。それらは，ロシア・フランス・プロイセンを三極とする戦争の危機をはらみつつ，大陸ヨーロッパ諸国において顕著な経済的発展が進行し，その経済的発展を基礎として，「プロレタリアートのきわめて力づよい発展が始まった」[13]時代であった。またiv) aの使用例で，エンゲルスは，「上からの革命」に対抗するものとしてのプロレタリアートを担い手とする「下からの革命」に言及している。第三に，v）においては，用語――「上からの革命」がクーデターをさしていることは明らかであるが，この場合，エンゲルスにあっては，そのクーデターは社会民主党に指導されたドイツ・プロレタリアートの革命運動に対抗するものであると考えられていたのであった。

エンゲルスにおける用語――「上からの革命」のこれら三つの用法のうち，第一の用法は，最も早くあらわれているとともに，最も限定的な用法である。それに対して第二，第三の用法は，第一の用法において用語――「上からの革命」がさしているプロイセンによるドイツ統一過程を念頭において使用された用法である。従って，「上からの革命」は，第一の用法より転じてエンゲルスがドイツ第二帝政史研究のために採用した概念であり，第二，第三の用法は，エンゲルスが後にその概念を一般化して適用したものであると考えられる。以上のような理由によって，エンゲルスの「上からの革命」概念を究明するためには，第一の用法における「上からの革命」の概念内容を分析することが必要である。

第3節　エンゲルスの「上からの革命」の概念内容

1　「上からの革命」の概念内容を明らかにするためには，まずその対概念である「下からの革命」概念を検討しなければならない。その際，服部の「上からのブルジョア革命」概念との比較にとっての重要な問題は，「上からの革命」の対概念としての「下からの革命」が，エンゲルスにあっては「下からのブルジョア革命」であると考えられているか否か，という問題である。すでに，用語――「上からの革命」のiv) aの使用例においては，フランスにおける「下からの革命」がプロレタリア革命であることを指摘しておいたが，ここでは更に，ドイツにおける「下からの革命」とは何か，ということを検討する。

用語――「上からの革命」は，プロイセンによるドイツ統一過程をさすものであったが，エンゲルスは，1848年以後，ドイツ統一のためには次の三つの道が開かれていたとしている。①すべての支邦をなくすことによる真の統一の道，②オーストリア優位のもとでの統一の道，③プロイセンを先頭とする統一の道。[14]そのうち，ドイツ統一過程における基本的対抗は，①真の統一の道と③プロイセンによる統一の道との間にあった。エンゲルスは，ブルジョアジーによって担われた1859年以降のイタリア統一過程[15]をこの「真の統一の道」のモデルとしているが，1848年以降のドイツブルジョアジーは，すでにこの任務を担うだけの革命性を失っており，③プロイセンによる統一の道に身を委ねたのである。[16]とするならば，エンゲルスは，誰が「真の統

注 (12)　「1893年5月8日のフリードリヒ・エンゲルスの『ル・フィガロ』紙特派員とのインタビュー」第22巻，p. 539.
(13)　エンゲルス，前掲『「フランスにおける階級闘争」1895年版序文』第22巻，p. 517.
(14)　前掲『歴史における暴力の役割』第21巻，pp. 416～20.
(15)　「イタリアでは当時なお……大工業は揺籃期にあった。労働者階級はまだ……プロレタリア化されていなかった。……それゆえに，ブルジョアジーのエネルギーは……まだ挫かれていなかった。」（同前，p. 415）
(16)　同前，pp. 424～6.

一の道」を担うべきであると考えていたのであろうか。

エンゲルスが社会民主党の綱領の中で，「上からの革命」に対して「統一共和国」の建設の路線を提起したことは，第2節ii）で指摘したが，その「統一共和国」建設に関して，エンゲルスは別の場所で次のように書いている。「『新ライン新聞』の政治綱領は次の二つの主要点からなっていた。単一不可分の民主的ドイツ共和国と，ロシアとの戦争がそれである。……彼ら〔＝プロレタリアート〕の利益が要求していたのは，ドイツを単一の民族に最後的に統合することであった。……しかしプロレタリアートの利益からすれば，プロイセンを頭部とする制度を打ち立てることも，やはり同様に許せなかった。プロイセン国家こそは，その全制度，その伝統，その王朝ともどもに，ドイツ革命が打ち倒すべき，国内唯一の重大な敵であった。」(17)

エンゲルスによれば，「真の統一の道」とは「単一不可分の民主的ドイツ共和国」建設の道であり，それはプロレタリアートによって担われ，ドイツ革命（プロレタリア革命）(18)によって完成されるべきものであった。従って，ドイツにおける「下からの革命」は，プロイセンを先頭とするドイツ統一の道に対する，プロレタリアート指導下の「単一不可分の民主的共和国」建設の道を意味するものであった。エンゲルスにあっては，ブルジョアジーによるドイツ統一の道は，プロイセンによる統一の道に吸収されるものであると考えられており，議会内ブルジョアジーとビスマルクの対立には，副次的な意義しか与えられていないのである。

2　「上からの革命」は，それ自身としては，「下からの革命」（プロレタリア革命）に対抗する反革命の「勝利」の過程として理解されるべきものであった。とするならば，プロレタリア革命を唱道する立場に立つエンゲルスが，なぜ，それを「革命」として評価したのであろうか。この問題を明らかにするためには，ドイツにおけるブルジョア革命に関するエンゲルスの見解の展開過程を検討することが必要である。

i）「『ドイツ農民戦争』1870年版序文」（1870年2月）

①1848年以来のドイツ商工業発達の評価。にもかかわらず，ブルジョアジーは政治的支配権を獲得していないことが指摘されている。（後者の側面の重視）プロイセン―オーストリア戦争の消極的評価。(19)

②ドイツが当面する革命の課題がプロレタリア革命であることを示唆。(20)（ドイツにおけるブルジョア革命完成の時期及び形態に関する見解は，この段階ではまだ示されていない。）

ii）『住宅問題』（1872年5月～1873年1月）

1866年以来，特に1870年以来，ドイツ国家のボナパルティズム君主制への移行が進行していることについての指摘。(21)

iii）「『ドイツ農民戦争』1875年版序文」（1874年7月）

①ドイツ国家のボナパルティズム君主制への移行の契機としての1866年と1870年の戦争の意義を積極的に

注（17）エンゲルス「マルクスと新ライン新聞」1884年，第21巻，pp. 19～20.

この点について，マルクスの意見はより鮮明である。「いまは事実上，ドイツの統一なるものはない。これはドイツ革命によってしか築くことはできないであろう。」（書簡，マルクスからポール・ラファルグへ，1869年6月2日付，第32巻，pp. 608～9.）

（18）3月革命の挫折以後，マルクス・エンゲルスの考える「ドイツ革命」は，プロレタリア革命として完成されるべきものであった。「この戦役〔＝ドイツ国憲法戦役〕が敗北に終わったあとでは，いくぶん立憲化した封建的＝官僚的君主制が勝利するか，それとも真の革命が勝利するか，そのどちらかでしかありえない。しかも，ドイツでは，革命は，プロレタリアートの完全な支配がうちたてられるまでは，もはや終結することはできない。」（エンゲルス「ドイツ国憲法戦役」1850年，第7巻，p. 196）

（19）「ドイツの社会関係には，1866年は，ほとんど何の変化も及ぼさなかった。……1866年の大国事劇よりもはるかに重要なのは，1848年以来のドイツの商工業……の進歩である。……ブルジョアジーの社会的地位はそれに応じてたかまった。……それだのにブルジョアジーが政治的支配権も合わせて獲得せず……」（エンゲルス「『ドイツ農民戦争』第二版（1870年）への序文」1870年，第16巻，pp. 533～4.）

（20）「農村日雇労働者の大衆が自分自身の利害を理解できたその日から，反動的・封建的・官僚的，あるいはブルジョア的な政府は，ドイツでは不可能となる。」（同前，p. 400.）

（21）「1866年，とくに1870年以来は，社会状態の変革が，そしてそれとともに古い国家の解体が，……絶対君主制からボナパルティズム君主制への移行が，さかんに進行しているのである。」（エンゲルス『住宅問題』1872～73年，第18巻，p. 259）

ここでは「ボナパルティズム」が国家の本質的性格（ブルジョア国家）を示すための用語として使用されている。

評価。[22]

②ドイツ第二帝政下において実現されるべき課題は，ブルジョアジーの政治権力獲得ではなく，ブルジョアジーの社会的解放であることを示唆。[23]

iv）書簡「エンゲルスからブラッケへ」1878年4月30日付

ドイツにおけるプロレタリアート支配実現のための必要条件は，「ブルジョア的経済体制」の発展であることについての指摘。[24]

v）「『住宅問題』第二版序文」（1887年1月）

①「1866年と1870年の革命」はドイツ大工業発展のための前提条件を整備したとの評価。[25]

②機械と工場制経営の発展によって，古い社会的諸条件のもとで農業及び工業革命が進行するとすれば，その変革が，一つの転換点（労農同盟成立の前提条件）となるであろう，という見解が表明される。[26]

以上の整理は，プロレタリア革命の枠組みの中で考える時，ドイツにおけるブルジョア革命はいかなるものとして理解されるべきものであるか，という問題に関するエンゲルスの見解の発展過程を明らかにするためのものである。すなわち，i）「70年版序文」のエンゲルスは，まだこの問題に正面から取り組む姿勢をもっておらず，むしろ，1848年以来の商工業の発達にもかかわらず，ブルジョアジーが政治権力を掌握していないのは何故か，という理由の解明に，分析の力点をおいていたのであった。然るに，ii）『住宅問題』（1872～3）における，「ドイツ国家のボナパルティズム君主制（ブルジョア国家）への移行」という認識を転回点として，エンゲルスは，ドイツにおけるブルジョア革命を考える際の観点を，ブルジョアジーの政権掌握という側面からブルジョア的経済体制の発展という側面へと移しはじめ，それとともに，1866年と1870年の二つの戦争の意義を積極的に評価するようになる。その最初のあらわれが，iii）「1875年版序文」（1874）における二つの論点のうちに認められる。更に iv）「ブラッケへの手紙」（1878）において，ブルジョア的経済体制の発展こそ，プロレタリア革命の重要な前提条件をなすものである，ということが確認され，v）「『住宅問題』第二版序文」（1887）において，そのブルジョア的経済体制発展に対する「最悪の政治的障害」〔＝小邦分立状態〕を除去した「革命」としての，前記「二つの戦争」の評価が定着する。『歴史における暴力の役割』（1887～8）において，用語――「上からの革命」が初めて使用されるのは，まさに1887年12月から1888年2月に至る時期であった。

とはいえ，『歴史における暴力の役割』においては，新帝国の成立（1871）をもってドイツにおけるブルジョア革命が完成された，という把握がなされているわけではない。エンゲルスによれば，ドイツ・ブルジョア革命が，ブルジョア革命として完成されることがあるとすれば，そのためには，新帝国が，「意識的に断固として究極的なブルジョア支配をめざしてすすむ」[27]こと，すなわち，「イギリス憲法に対応する状態への道をひら（き）……フランス大革命の全成果をだんだんとドイツに移植する」[28]道をとることが必要であった。[29]ところが，1871年以後の新帝国では，これとは反対に，

注（22）「ほかならぬプロイセン軍隊の勝利が，プロイセンの国家構造の基礎全体を移動させたのである。」（エンゲルス「『ドイツ農民戦争』1870年版序文への追記」1874年，第18巻，p. 513.）

（23）「ブルジョアジーは，自分の政治権力をいますぐ断念することによって，自分の徐徐の社会的解放を買いとるのである。」（同前，p. 514）

（24）「わが国でできる限りの発展を必要としているものは，まさに，資本を集中して諸対立を尖鋭化させるところのブルジョア的な経済体制です。」（書簡「エンゲルスからブラッケへ」1878年4月30日付，第34巻，p. 328）

（25）「わが国の大工業は……1866年と1870年の革命がすくなくとも最悪の政治的障害をその行く手からとりのぞいたのちに，はじめて完全に発展することができた。」（エンゲルス「『住宅問題』再閲第二版の序文」1887年，第18巻，p. 652）

（26）「機械と工場制経営が農村家内工業とマニュファクチュアを滅ぼすということは，ドイツでは……農民の犠牲で資本と大土地所有の利益のために工業および農業革命がおこなわれることを意味している。もしドイツがこの変革をもはやり古い社会的諸条件のもとでなしとげる運命にあるとすれば，この変革が無条件に一つの転換点となるであろう。……産業革命が農村にひろがり，それとともに住民中の最も安定した，最も保守的な階級が革命の温床に変えられ，……いやおうなしに蜂起に駆りたてられる。」（同前，pp. 654～6）

（27）前掲『歴史における暴力の役割』p. 454.

（28）同前，pp. 453～4.

（29）1870年には，新帝国がこの道を進むことによって「政治的にはるかに先行しているほかの西ヨーロッパ諸国に追いつくことのできる軌道」（同前，p. 453）に乗る可能性は，論理的には存在しており，その道を進むことが「有産階級の立場からすれば……唯一の合理的なこと」（同，p. 454）であった。しかし，「労働者階級の立場からすれば，もちろん，

「旧プロイセン国家の維持・ドイツの漸次的プロイセン化をめざ」[30]す反動的な道，あるいは「ビスマルクの支配のたんなる維持をめざ」[31]すボナパルティズム的な道が選択された。そのことによって，新帝国が西欧型のブルジョア国家に移行してゆく可能性が遮断され，「上からの革命」によっては，ブルジョア革命の課題が「半分」[32]（プロイセン的ドイツ統一・ブルジョア的経済制度発展のための基盤整備）しか達成されず，あとの「半分」[33]（統一共和国建設・ブルジョア民主主義革命の課題）の達成は，プロレタリアートの事業として継承されるべきであること，すなわち，ドイツにおけるブルジョア革命は，ブルジョア革命としては完成されえず，プロレタリア革命の局面において『完成』されるべきものであることが明らかになったのである。

プロイセンによるドイツ統一は，①ドイツ資本主義発展の基礎を作り出すとともに，②強力に統一されたプロレタリアートをも作り出し，③ブルジョアジーとユンカーとの反革命同盟を，ドイツ・ボナパルティズムという形で，プロレタリア革命が打倒すべき国内唯一の敵として完成したこと，の三点において，プロレタリア革命の前提条件を成熟させた。エンゲルスが，ドイツにおける資本主義の発展をプロレタリア革命の不可欠の前提条件としたのは，資本主義の発展が組織されたプロレタリアートを生み出すという一般的な意味においてだけではない。古い社会的諸条件のもとでの資本主義の発展そのものが，農民の生活を破壊し，それによって革命化された農民を，プロレタリア革命に合流させる，という意味において，（ブルジョアジー・ユンカーの反革命同盟に対する労農同盟成立のための前提条件）エンゲルスはドイツにおける資本主義の発展の必要性を，特に重視したのであった。従って，「上からの革命」は，プロレタリア革命として完成されるべきドイツ革命の枠組の中で，ブルジョア革命の課題を，ブルジョア革命の形態で達成され得る範囲で実現し，プロレタリア革命の前提条件を準備した，という意味においては，括弧つきの「ブルジョア革命」である，と理解することができる。[34]「上からの革命」のいわゆる「上から」の概念は，「下からの革命」としてのプロレタリア革命に対抗するブルジョア革命を意味するものであったが，「革命」の概念は，ドイツにおいて考えることのできるブルジョア革命が，プロレタリア革命の前提条件を準備する限りの「ブルジョア革命」を意味するものでなければならない，ということなのであった。

第4節　服部之総の「上からのブルジョア革命」概念とその批判

1　本節においては，服部が，エンゲルスの「上からの革命」概念をどのように理解し，援用したか，という点の考察を通して，服部の「上からのブルジョア革命」概念の理論的内容を検討する。[35]まず始めに，「上からのブルジョア革命」概念の検討のために必要な三つの論点に関して「絶対主義論」・「明治維新史」における服部の所説を整理するならば，以下のようになる。

i）絶対主義について

①絶対主義国家は封建国家の範疇に属し，封建貴族とブルジョアジーとの階級均衡に基く国家権力の両階

持続的なブルジョア支配を確立するには，すでに時はおそすぎたことは明らかだった。」（同，p. 454）という理由から，新帝国が西欧型の道をとることによって，ブルジョア革命をブルジョア革命として完成させる現実的可能性は，著しく狭められていた。また，ここでエンゲルスが，ブルジョア革命の課題としてのブルジョア民主主義革命の課題に言及していること（フランス大革命の全成果の移植）に注意すべきである。

注 (30)(31)　前掲『歴史における暴力の役割』p. 454.

(32)　「われわれが彼を非難するのは……彼がただ上からのプロイセン流の革命家であったこと，彼が革命を半分しか遂行できない立場で全革命を始めたこと……」（同前，p. 433）

(33)　「われわれは……上からの革命を逆行させるのではなく，下からの運動によって必要な補足と改良をこれに加えるべきなのである。」（前掲「1891年の社会民主党綱領草案の批判」第22巻，p. 236）

(34)　「1848年の革命は社会主義革命ではなかったにしても，社会主義革命への道をならし，その基盤を準備した。」（エンゲルス「イタリアの読者へ」1893年，第22巻，p. 366）。「1848年の革命の墓掘り人は，その革命の遺言執行人となった。そして彼らのそばに，脅威的に，1848年の相続人であるプロレタリアートが，インタナショナルに結成されて立ち上がっていた。」（エンゲルス，前掲「『フランスにおける階級闘争』1895年版序文」第22巻，p. 516）

(35)　さしあたり，本稿の論述においては，検討の対象を，服部の1920年代後半の著作である，「絶対主義論」（1928年）と「明治維新史」（1928年）に限定する。本稿での引用は，『明治維新史・附絶対主義論』上野書店，1929年版によるものとする。

級からの外見的独自性保持という点に，その国家形態上の特質を持つ。[36] その歴史的役割は，封建的生産体制の資本制生産体制への転化過程を温室的に助長することにある。この歴史的役割の故に，絶対主義は，自らの存立条件を破壊しつつ，その反対物に転化する必然性を持つ。[37]

②ブルジョア革命は，絶対主義の崩壊過程としてのみ理解されるから，ブルジョア革命の二類型〔「上から」および「下から」のブルジョア革命〕は，絶対主義崩壊過程における二類型〔ドイツ型とフランス型〕として把握される。このうち，「下からのブルジョア革命」の特質は，ブルジョアジーが終始革命的であったために，絶対主義が一切の封建的諸特権とともに徹底的に払拭された点にある。[38]

ii) ドイツにおけるブルジョア革命について

①ドイツにおけるブルジョア革命は，国際的要因（ナポレオンの侵略）を契機として，1808～13年に，絶対主義国家権力をその担い手として着手された。[39]

②ブルジョアジーによって担われたブルジョア革命は，ドイツ・ブルジョアジーの経済的発展を基礎として，1840年頃に始まり，1848年に本格的に闘われたが，1848年の革命は，ドイツ・ブルジョアジーの，絶対主義に対する，最初で最後の公然たる蹶起であった。ブルジョアジーは，プロレタリアートに対する恐怖の前に，自己の革命性を永遠に放棄したからである。[40]

③1848年は，同時に，絶対主義国家にとっての，近代国家への「転換」のはじまりの年でもあった。それ以後，絶対主義権力は，ブルジョアジーの経済的要求の遂行者として存続し，1866年と1870年には，ブルジョアジーの願望であったドイツ統一を実現した。そして，そのドイツ統一が，プロイセン国家の近代国家への転換を促進した。[41]

iii) 上からのブルジョア革命について

①服部の理解によれば，エンゲルスは，プロイセン国家の絶対主義からボナパルティズムへの転化過程を，ブルジョア革命の特殊的類型として把握したとされるが，ドイツ第二帝政下においては，ブルジョア革命の最も重要な課題である農民解放が完了していないから，「ビスマルク的プロシア的ボナパルティズムの『上からの』ブルジョア革命」は完成されなかったことが強調されている。[42]

②「この種のブルジョア革命の変種は一即ち『上からのブルジョア革命』は，一般に，発展にとり残された封建的乃至半封建的国家が，進んだ国際的資本主義の環境の下に，……滅亡を免れんとして……努力する場合に，往々生じたところであって，我国の場合もその典型的例である。」[43]

服部の見解における第一の特徴は，「上からのブルジョア革命」が，その対概念である「下からのブルジョア革命」〔＝ブルジョア革命の一般的類型〕に対する，ブルジョア革命の特殊的類型として把握されていることである。その際，類型の区分は，ドイツ一国史における「上から」と「下から」のブルジョア革命の対抗という視点にではなく，ブルジョア革命の「ドイツ型」と「フランス型」の相違という視点にもとづいている。第二に，「ドイツ型」と「フランス型」の相違としては，革命の主体（絶対主義権力であるか，ブルジョアジーであるか），革命の徹底性（特に農民解放が実現されているか否か）などの点が挙げられるが，服部にあっては，「フランス型」が完成されたブルジョア革命であるのに対し，「ドイツ型」はあくまで未完のブルジョア革命として把えられており，将来においても「上からのブルジョア革命」としては完成されえないものとみなされている。[44] 第三に，服部は，フランス革命の一応の

注 (36) 前掲「絶対主義論」p. 198.
(37) 同前，p. 204.
(38) 同前，pp. 204～5.
(39) 同前，pp. 211～2.
(40) 同前，pp. 214～5.
(41) 同前，pp. 219～23.
(42) 「絶対主義論」への追記（1947年）『服部之総著作集・第4巻』理論社，1955年，pp. 50～52. 「絶対主義論」執筆当時から1940年代後半にかけて，「上からのブルジョア革命」概念に関する服部の所説に，変化のあとは認められない。
(43) 前掲「明治維新史」p. 120.
(44) 「ビスマルクのドイツにおけるブルジョア革命と農民の解放は……〔1874年においても〕なんらまだ完成されるどころの沙汰ではなかった。そこでエンゲルスは……もしも1900年まで彼が生きのび，その間ドイツにとっても世界にとっても浪風ひとつ立たなかったとしたら，ビスマルク的プロシャ的ボナパルチズムの『上からの』ブルジョア革命が完了するという奇蹟が起るであろう，と書いたのである。歴史のその後の進行は，エンゲルスのこのてきびしい揶揄を完全に立証した。」（前掲「追記」p. 52.）

完成形態（第一共和制）に，ブルジョア革命の範型を見出し，それを基準として，服部がそれ自身としては完成されえないとした「上からのブルジョア革命」の完成の目標を設定した結果，「上からのブルジョア革命」が，「下からのブルジョア革命」と同じ完成形態を持つことになり，「上からのブルジョア革命」が，「下からのブルジョア革命」に対して，独立した別個の類型をなすかの如く論じる『類型論』を，服部自らが否定する，という矛盾に陥ったのである。

Ⅱ　服部の所説に関する以上の整理にもとづいて，エンゲルスの「上からの革命」概念と服部の「上からのブルジョア革命」概念との相違を検討した結果は，以下のように要約することができるであろう。

i）エンゲルスは，「下からの革命」をプロレタリア革命と理解し，そのプロレタリア革命との対比において，ドイツ第二帝政形成の過程（プロイセン領導下のドイツ統一過程）を，「上からの革命」として把握するが，それに対して，服部は，フランス型ブルジョア革命を「下からのブルジョア革命」とみなして，それに対する，ブルジョア革命の「特殊な型」としてのドイツ型ブルジョア革命を考え，それを「上からのブルジョア革命」と名付けた。

ii）エンゲルスがプロレタリア革命の枠組みの中で「上からの革命」を考えたのに対して，服部はブルジョア革命の枠内で「上からのブルジョア革命」を考察し，フランスとドイツの比較考察においても，エンゲルスは，三月革命→ドイツ第二帝政（ドイツ・ボナパルティズム）というドイツ史の発展過程に対して，プロレタリア革命の観点から，フランス史の二月革命→フランス第二帝政（ボナパルティズム）→パリコミューン（プロレタリア革命）を対置し，そこに両第二帝政のボナパルティズム（プロレタリア革命によって打倒されるべき対象）としての同一性を見出すが，他方，服部は，ドイツ史のシュタイン＝ハルデンベルク改革期→三月革命→ドイツ第二帝政に対して，フランス大革命期→第一共和制→第一帝政（ボナパルティズム）という過程を対置し，両国におけるブルジョア革命の型の相違を強調しようとする。フランス第一帝政とドイツ第二帝政との比較においても，フランスのボナパルティズムがフランス革命によって完全に解放された分割農民を階級的基礎としているのに対して，ドイツのそれは，ユンケルを階級的基礎としている，との観点から，両者の差異が強調されるのである。(45)

iii）服部は，「上からのブルジョア革命」概念を組みたてるために，エンゲルスの四つの論説〔『ドイツ農民戦争』の二つの序文（1870・74），『住宅問題』（1872～3），『歴史における暴力の役割』（1887～8）〕を援用しているが，その場合，1870年代初頭から1880年代後半にかけてのエンゲルスのドイツ第二帝政の史的分析の発展の過程がふまえられていない。その結果，服部は，「上からの革命」概念形成の重要な前提をなす，ドイツにおける「ブルジョア革命」の特殊な位置づけに関し，1880年代後半にエンゲルスが到達した見地を看過したのではなかろうか。

要するに，服部は，エンゲルスの「上からの革命」概念を，ブルジョア革命の枠内で把握しようとした結果として，「上からのブルジョア革命」概念を捻出せざるを得なかったのであるが，これに対して，エンゲルスは，ドイツにおける「ブルジョア革命」がプロレタリア革命の前提条件を準備するものであるという見地から，プロイセンによるドイツ統一をもって，ドイツにおける「ブルジョア革命」の「完成」と理解し，それがプロレタリア革命〔＝下からの革命〕に対抗する「ブルジョア革命」〔＝上からの革命〕でしかなかった，という限界を指摘しながらも，これを「革命」として積極的に評価したのであった。

ドイツ・ブルジョア革命はプロレタリア革命の局面で『完成』されるべきものである，という，エンゲル

注（45）「例へば同じボナパルチスムスの国家に於いても……ナポレオン帝政のそれ自体の階級的基礎は自作農民にあった。これに対してビスマルクのそれは残存せしめられたるユンケル（封建的土地貴族）にあった。」（前掲「絶対主義論」pp. 197～8）。

村瀬興雄氏『ドイツ現代史』（1954年，東大出版）から木谷勤氏『ドイツ第二帝政史研究』（1977年，青木書店）に至る戦後の研究によれば，東エルベにおいては，「償却・調整法」（1850年）以来，グーツヘルシャフトのユンカー経営への転換が最終段階に入り，ユンカーに対する農民の封建的負担の有償廃棄の完了（1865～70年），土地所有に基づくユンカーの封建的諸特権の消滅〔領主裁判権（1850年）・領主警察権（1872年）廃止〕によって，1870年代初頭の時点で，ユンカーと農業労働者との間には，基本的に，資本主義的な生産関係が成立していた，とされており，ユンカー経営は，農業労働者を雇用して，自己の農場を経営し，企業利潤を追求する資本主義的農業経営である，と見なされている。従って，ドイツ第二帝政下におけるユンカーが，「封建的土地貴族」であるとする，服部の見解を，そのまま受け入れることには問題があるのではないか，と思われる。

スの，第二帝政期ドイツにおける，革命の「型」の把握こそ，「上からの革命」概念構成の前提をなすものであった。然るに，服部は，「上からのブルジョア革命」概念を捻出する過程において，この「型」の意味するところを理解しえなかったのである。そのことは，服部の，近代天皇制国家の理解における，「類型概念」の安易な把握と，決して無関係ではないであろう。

（大学院経済学研究科博士課程）